

目 次

はじめに	園長 永原 恵三	1
I. 平成 21 年度の研究について		
「環境に対する豊かな感受性を育む」－2 年次－	伊集院 理子	5
II. 実践事例		
1. 春		
＜資料＞ 春の園庭マップ		
事例 1 「おやまにみんなででかける」	伊集院 理子	13
事例 2 「神様の木」	上坂元 絵里	15
事例 3 「色が変わる」	吉岡 晶子	16
事例 4 「いなくなったカメのチュウをめぐって」	佐藤 寛子	18
事例 5 「おそらがくるくる」	北村 京子	23
2. 夏		
＜資料＞ 夏の園庭マップ		
事例 6 「香りやさん」	佐藤 寛子	27
事例 7 「キュウリの匂いがしない？」	渡邊 満美	29
事例 8 「チョウのおうち」	高橋 陽子	30
事例 9 「セミの声」	吉岡 晶子	34
事例 10 「種をまいてヒマワリを育てる」	上坂元 絵里	35
3. 秋		
＜資料＞ 秋の園庭マップ		
事例 11 「海の音」	矢吹 阿祐美	41
事例 12 「シェイクしながら色水作り」	宮里 暁美	42
事例 13 「種の博物館」	上坂元 絵里	44
事例 14 「虫を探している時間」	宮里 暁美	46
事例 15 「シイノミ」	北村 京子	48
事例 16 「幼稚園の匂いだ」	北村 京子	49
事例 17 「シイノミを食べる」	宮里 暁美	51
事例 18 「木の皮でクッキーやさん」	上坂元 絵里	52
事例 19 「段ボール電車に乗って」	伊集院 理子	54
4. 冬		
＜資料＞ 冬の園庭マップ		
事例 20 「イチョウの葉っぱの枕」	佐藤 寛子	61
事例 21 「チョークアート」	吉岡 晶子	64
事例 22 「雪のかき氷」	矢吹 阿祐美	65
事例 23 「火おこし」	佐藤 寛子	68
事例 24 「思い出ノート作り」	高橋 陽子	69
III. 研究のまとめと課題	伊集院 理子・佐藤 寛子	73
IV. 資料		
1. 公開保育研究会 講演会記録	友定 啓子先生	85
2. 幼稚園 学びの概要		97
おわりに	副園長 宮里 暁美	99

はじめに

園長 永原 恵三

本園はお茶の水女子大学の一角に位置していますが、大学全体が文京区の大塚という、起伏の豊かな土地にあり、そのおかげで園庭も変化に富んだ場所になっています。そして何よりも、この地に園舎が移って以来 70 数年にわたる年月を経て育まれた自然は、この園で過ごす子どもたちだけでなく大人たちも含めた多くの人びとに、尽きることのない体験と心の輝きを与えています。それは、本園の何ものにも代え難い財産と思います。

私たち人間は、普段の生活のなかで何気なく時のたつことを知ったり、場所を移動して動いたりしています。でも、一人ひとりの生きてきた道のりを振り返った時に、時間や空間の経験が幾重にも積み重ねられて、今の自分があることに気づくことがあります。その経験は、けっして歴史的な事件のような大きな事柄ではなく、日々の日常のなかに見え隠れしながら、私たちの身体の中に少しずつ、でもたしかに感じて体験したことにちがいません。「環境」という言葉のその通りに、私たちの周りにあるもの、すべてから時間や空間の経験を受け取っているはずです。

普段の生活のなかにある自然は、とても具体的に時の流れや場所のすがたを見せてくれます。本園の園庭もまた、日々の園の生活のなかで毎日毎日変化し、そこに関わる子どもたちや大人たちがその変化に気づき、関わることによって、とても具体的なかたちで、時間と空間の存在を体験させてくれます。それは、時計や定規によって計られた量としての時間や空間ではなく、自然の動植物が生きていることによって育まれた質としての時間や空間であると言えます。だからこそ、生きている子どもたちや大人たちの身体に蓄積されてゆく時空間であり、また、ともにそこに生きているものとして、その時空間のなかに漂うことができるのでしょう。

本園の園庭の小高い場所を、私たちは「おやま」とよんでいます。そこには樹齢何百年と言われる大イチョウがあります。秋になると落ちたイチョウの葉っぱで、「おやま」一面が黄色い絨毯になります。その絨毯に包まれて秋の澄みきった青空を見上げることができるのは、自然の惜しみない恵みを享受していることに他ならないでしょう。一人の人間という限りある存在にとって、遙かな時間の流れと空間の広がりを感じる瞬間が、そこにあります。でも、ほんとうは、自然はいつもそんなすてきな瞬間を用意してくれているのであって、それに私たちが気づくことのほうが、もっと大切であるにちがいません。

おわりに

副園長 宮里 暁美

平成 21 年度に取り組んだ研究内容を、ようやくまとめることができました。「環境に対する豊かな感受性を育む」を研究テーマとして取り組んだ 2 年目の研究です。

「環境」をテーマとして研究を進める中で、私たちの関心は、「目に見えるもの」から、場が醸し出す雰囲気、光や影、香り、風など「目に見えないもの」へと、ひろがっていきました。「目に見えないもの」は、その場にいなければ感じることはできません。その場に行くこと、その場に居続けることが何より大切になります。教師自身もゆっくりその場にながら、耳をすませたり、目をつぶったり、見上げたり、見渡したり、腕をひろげたり、しゃがみこんだりして、からだ全体で感じたことが、研究の土台となっています。

環境に関わり様々なことを感じ取りながら、子どもたちが感じたことについて思いをめぐらし、環境の中で様々な体験をしている子どもたちの姿や自分の思いを事例に書き留めました。事例を持ち寄りそれぞれの思いを出し合う話し合いは、時間の経つのを忘れるほどに白熱し、そのような中で、一人一人の教師の中に気づきのひろがりや関心の深まりが生まれ、そのことが保育の中に生きていくといううれいつながりを実感する日々でした。

本研究は、教師の意識変革や子どもたちの遊びの豊かさを生み出すきっかけとなっていますが、課題は数多く残されています。今後さらに実践を積み重ね研究を深めていきたいと考えます。

最後になりましたが、ご指導いただきました山口大学教授友定啓子先生、多くの示唆をいただきました東京大学教授秋田喜代美先生、研究を支えてくださいました本大学准教授浜口順子先生はじめ諸先生方、本園の教育活動や研究を見守り支えてくださっている学校評議員の皆さま、附属学校園の先生方、自然との豊かなかかわりを共に味わった子どもたちや保護者の皆さまに、心より御礼申し上げます。

平成 21 年度 研究 同人

園 長	永 原 恵 三	教 諭	佐 藤 寛 子
副 園 長	宮 里 暁 美	教 諭	北 村 京 子
教 諭	吉 岡 晶 子	教 諭	矢 吹 阿 祐 美
教 諭	伊 集 院 理 子	養 護 教 諭	渡 邊 満 美
教 諭	上 坂 元 絵 里	非 常 勤 講 師	鈴 木 由 布 子
教 諭	高 橋 陽 子	非 常 勤 講 師	市 原 沙 耶 香